法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

法の外部、転生への欲望 ： 池宮城秀一「存在はかすめ盗る手つきに似て」を読む

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)
法政大学多摩論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
TAMA BULLETIN / 法政大学多摩論集
(巻 / Volume)
39
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
87
(発行年 / Year)
2023-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026467

法の外部、転生への欲望
―― 池宮城秀一「存在はかすめ盗る手つきに似て」を読む ――

鈴　木　智　之

はじめに

体感の水準で把握される「状況」がある。それは、認識という言葉にふさわしいだけの言語的分節性や概念的明確性を十分には伴わず、例えば恐れや不安、漠然とした怒りやこみ上げる嘔吐感のようなものとして体験されるかもしれない。しかし、そのような形で確かに、私たちの心身は世界を捉えている。そして、詩人や小説家はしばしば、その体感を表象に転化し、生の実相に言葉を与え、その状況から湧き上がる欲望を形象化しようとする。その感性の言語は決して論理性をもたないわけではない。読み手もまた、自らの身体に生じる感覚を頼ることでしかそのテクストに触れることはできないのだが、その体験を消化することを通じて獲得することのできる認識は存在するように思われる。

以下の小論では、剝き出しの生の位相に生じる情動と欲動を、仮想の地下空間において展開させていく小説、池宮城秀一「存在はかすめ盗る手つきに似て」(1968年) の読み解きを試みる。

池宮城の初期（1960年代）の小説群は、肉としての存在が他の存在に出会い、奪い合い、食い尽くしあい、傷を与え、傷を受けながら「力」を内包しようとする様を、しばしば死に至る過激な性の交わりのなかに描き出そうとする。そこに表される暴力的な性の様相に心理学的な名を付与することはできるし、それをある種の病理として、現実社会での人間関係の不全の反転によって生じたものと位置づけることも可能である。しかし、そのような病理カテゴリーを介した読解が、一群のテクストを駆動していた「存在の揺動」を見落としてしまうとすれば、それは作品の矮小化につながるだろう。

筆者は前稿 (鈴木2021) において、池宮城の4作品 ――「出会いの時」(1962年)、

「記憶の裁断」(1966年)、「秩序の彼方へ」(1966年)、「矢のような腐乱死体よりも疾く」(1968年) —— を縦断的に読み、そこに「秩序の彼方」における「出会い」の試みと、「善悪の彼岸」に突き抜けていく力への希求という二重の欲望と、その二重の破綻のプロセスを見いだした。そこでの考察を引き継ぎ、必要に応じて先行する諸作品を参照しながら、まずは可能な限りテクストに内在する形で、物語を起動させる緊張とこれを展開させる論理を抽出していこう[1]。

1. 作品の構成・筋の進行

(1)「街」と「部屋」: 世界の二元的構成

作品は、「シラシラと明けやる街に立っていた」(51) という一文から始まる。「男」は、「影絵のように浮きあがる建物たちの、墓場に似た静寂」(51) のなかを歩いている。「男」にとって、ここは故郷の街ではない。故郷へと帰る途上に「男」はいる。

その「男」に、突然「お待ちになって」という声がかかる。背後の「暗い穴倉のような入り口」から「女」の声がする (51)。「男」は「黒い喪服の女」の呼びかけに応じて、地下の部屋へと下りてゆく。

この導入の展開は先に挙げた同時期の諸作品 (特に「秩序の彼方へ」「矢のような腐乱死体より疾く」) と同型である。「街」にあって孤独な「男」が、「女」または「少女」に呼び止められ、地下の空間へと導かれる。世界は二元的な空間として配置されており、その一方 (地上＝光の領域) から他方 (地下＝闇の領域) へと移動するところに物語が始まる。

この「部屋」に下り立つということは、実存の舞台、すなわち「裸形の存在」が出会う場所に立つことを意味する。「街」＝「社会」のなかでまとわされていた同一性を脱ぎ捨て、未定の存在として他者に相対すること。その他者との交わりのなかで、その呼びかけに応えて、何者にもなりうるような可塑性を獲得すること。それは、法の外部に立って、傷つきやすい状態で暴力に身をさらし、存在の破壊あるいは収奪の危険に耐えることであるが、同時に、原初的な生に回帰し、そこからの転生 (存在の回復) をはかる企てでもある。

(2)「主人」となる

「女」は「男」に、「あなたが必要だったのです。だからずっと今日まで待ちつづけていたのです」(52) という。「男」は、なぜ「おまえだけが僕を必要なのだ」と問いながらも、「女」に導かれるままに「階段を降り」「長い廊下」を渡って「館」へと入ってゆく。そして「女」は、「あなたはこれからこの館の主人になるのです」(53) と告げる。この館には「女」のほかに「少年」と「召使いたち」がいる。長らく「主人」が不在であったこの「館」は「あなた」を待っていたのだという。

「男」は「主人」として呼びかけられている。なぜ「女」たちは「男」を「主人」として召喚するのか。その手がかりは、「女」の次の言葉にある。「私たちの一つの存在の貌ができあがるのに必要だった一人の役者はやっと今そろったところなの。(…) これから私たちの新しい方法がはじまるわ」(53)。つまり、それまで彼女たちは「存在の貌」を失っていた。その顔を作りだすために必要な「役者」として「主人」が必要だったのである。

「役者」とは役を担うものである。役割が決まらなければ「<無限の自由>という地獄」(56) に落ちてしまうのだと「少年」は言う。「主人」の役を担う者、すなわち己を所有し支配する者の存在を待ってはじめて、人は何者かへと転生しうる。実存の舞台において、存在を存在者たらしめる「力」の体現者が求められていたのだ。ただし、その「主人」の「力」は、はじめから「男」に備わっていたものではなく、彼に仕える者 ——「女」と「少年」—— の呼びかけによって付与されるのである。

このようにして、「男」は「今までの自分に訣別」し、この「見知らぬ領土」で「主人」となる。

「女」に導かれた「部屋」のなかで「男」が見いだした「少年」は、全裸のまま、鉄の椅子に座らせれ、鉄環と鎖でつながれている。「少年」は<もの>のようになって、この部屋の「闇」になじんでいる。「少年は自己が闇に呑まれ無に還ることを受け入れていたのだ」(54)。つまり、「少年」もまた「すべての生命がもろもろの原初の形でうごめいている」世界に呼び込まれていたのである。

しかしながら、少年には「鞭」があてられていた。それは、彼を「君臨するものとの縦の関係の中に組み入れるためだった」(54) と語られる。ここにも、主人と従属者というテーマが現れる。支配されることによってはじめて何者かになりう

る。そのためには、完全に＜もの＞となって「無」に還ってしまってはならない。「痛みや快感を味わう能力」を保持し続けなければならない。「鞭」は、そこにある「生の原形質」を「生きた存在」に保つための暴力である。

この「少年」の体を「女」が性的に蹂躙する。その行為と同時に「女」は「男」に愛撫を求める。「私をなくして、私をなくして」(54) と女は言う。性的な交わりは、存在を無に帰すものとしてなされ、しかし同時に、それによって存在を「内から支える」(54) ことになる。ここで、存在の無化（なくすこと）と存在の支持（支えること）が同時に生じていることに留意しておこう。

やがて「女」は疲れ切って、床の上に横たわる。

「男」は「少年」に歳を尋ねる。「十七です」と答える。「男」は自分が「三十三」であると告げる[2]。それから、「男」はナイフを求める。「召使い」が呼ばれ、ナイフが届けられる。ナイフを手にした「男」は「少年」に言う。

「僕はお前を素通りできなくなってしまったのだ。お前をほうっておけなくなったのだ。お前はこれから僕自身がお前への関わりをもつところで、僕の分身をやるのだ。それはおまえが無数の男にならなければならないということでもある。僕はいやおうなくお前にそれを強いるだろう。」(55)

このいささか謎めいた言葉の意味を明確に読み解くことは難しいが、これに続くやり取りを含めて見ると、さしあたり次のような含意を確認することができる。

この「館」のなかにあって「少年」は単数の存在ではなく、「複数の男」になりうる可塑性を備えている。そして、その変身、転生は、「自分自身」を「いけにえ」として差し出し、存在を「他人へ」と「明け渡す」ことによって可能になる。しかし、「男」が招かれる前の「女」との関係のなかでは、「女主人が行きつくところを失って」しまったために、二人とも「長く倦怠の日々」を送ってきた (55)。ここから上の引用に返れば、何者にもなりうる潜在的な状態に置かれながら、自己の存在をゆだねるべき他者をもたなかった「少年」に、「男」は自己の分身として転生せよと言っていることになるだろう。

(3) ＜ことば＞をあずかる、＜性＞を切り落とす

「少年」はその「男」の意思を引き受け、しかし、「あなたは私たちに言葉を持つ緩みを与えてはなりません」(55-56) という。この発話もまた容易な解釈を許さない。

しかしまずは、テクストのなかで「言葉」あるいは＜ことば＞が肉体、または肉としての存在と対置されていることを確認しておこう。「男」と「少年」の間に生じるものは、＜ことば＞を介在させない肉と肉の接触、力による肉の蹂躙のなかで「存在の秘密を盗み」とることだと言われる (56)。そのために、「少年」は「男」に＜ことば＞をあずけ、「男」がその＜ことば＞を引き受けるのである。

＜ことば＞とは、社会的世界において何者かとして構築された主体 (sujet) が、肉体とともに意志をもって行動する人間である時に、その思惟を担うものであると言えるだろう。だとすれば、＜もの＞へと引き下げられていた「少年」はすでに、「女」によって＜ことば＞を奪われていたのではないだろうか。それまでの「女主人」と「少年」との関係と、ここからの「男」と「少年」の関係にどのような違いが生じうるのだろうか。

やり取りのなかで「少年」は次のように言っている。

> 「私はすでにあの女主人によって切り取られてしまっていたのです。＜物＞のように女主人の自由になりながら同時に女主人の意志を自分が替わって持つように飼育されてきたのです。つまり私はあの女主人のある器具に加工されてしまっていたのです」(56)

ここで「切り取られる」という言葉で示されているものに二つの側面があることが分かる。一つには、自己の意志を奪われ、＜物＞のように他者の自由になっているということ。しかし第二に、その代わりに、その主人の「意志」を自分が替わってもつようになっているということ。つまり、自己の＜ことば＞を奪われながら、他者の＜ことば＞を与えられてしまっている。＜物＞と化しながら、他者の意志を生きてしまう。これが、この時点までの少年の「引き裂かれたまま生きる」という生の形である。

これに対して「男」は、その引き裂かれた身の「片割れ」を殺すのだと言う。そ

れは、「男の自由」がこれまで「少年の測りえなかった領分に踏み入れる」ことだとされる。ここでの＜ことば＞をあずけるとは、＜ことば＞の意味が完全に「消え失せる」(56) 段階に進むということである。男はそれを「おまえがどこまでも、無限に肉体と共に行けるように」(56) することだと表現している。一切の言葉を剝ぎ取られた生を生きること。これが、「男」が「少年」に授けようとしているものだと言えるだろう。

その剝き出しの肉体を支配する権力は、支配される対象としての肉に聖性を付与する。

> 男がこの少年に関係しなければならなくなった激しい衝動を、切り裂かれる者の大切さとして感じさせねばならないのだ。それは少年の体を神聖にするし、男自身の行為を純粋にするだろう。(57)

この時、この剝き出しの生を圧倒するであろう力によって「切り裂かれる」ことを、「少年」は待望している。「少年」は言う。

> 「ああ、僕を解いてください」(…)
> 「わたしを還してください。わたしは本当はわたしの鋭い若さを感じる時間の中にいたいのです」(57)

しかし、「男」はただ「少年」を性的に蹂躙するだけでなく、そのペニスにナイフをあて、傷つける。「半狂乱の叫び」をあげる「少年」。やがてその声は「うめき声」に変わる。「男」は吹き上げられた血に染まる。「男」は「少年」の腰に包帯を巻き、鉄環を解いて、階上の部屋に運び、寝かせる[3]。

なぜ「男」は「少年」の性器を切るのか。

ひとつの読み筋として、行為の直前になって、「僕はまだ17歳」で「やり直しがきくかもしれない」、「あなたはむごい」「僕を解いてください」と言い始めた「少年」の弱さに対する制裁、あるいは「男」がすでに失っている「若さ」を誇示する少年への怒りから、「男」は「少年」の一物に刃をあてたのだと見ることもできる。しかし、そうした心理的な読み方を排除することなく、「少年」の＜ことば＞を奪

い、その存在を切り裂いて「聖なるもの」と化すというふるまいを突き詰めていけば、「性根」を傷つけるという行為にいたるという論理を読むことができるだろう（つまり、「男」と「少年」の企てがこれによって成就に向かうのだということ）。

この行為に先立って、お互いの年齢を問う場面で、「男」はすでに「ナイフが要るのだ」と言っており、それに対して「少年」は「覚悟はできています」と応じている。この時点で、「ナイフ」が用いられることが予告され、「少年」もまたそれを受け入れていた、と読める。では、その性器を切ることによって、「少年」はいかなる存在となるのか。

「少年の勃起したセクス」を握り「ナイフをその根元にあて」たとき、「男」はこう言っている。

「おまえは無限の持続を持てるのだ。蛭に似た無限の持続を、蛭に似た無限の持続をだ。」(57)

ここには、この行為の意味を示す2つの手がかりが含まれている。1つには、それが「無限の持続」を手にするためのものだということ。この前に「少年」は自分が「まだ17歳」であることを口にし、「僕にはまだ試さなければならない生活がいくらでもある」のだと告げて、「わたしはほんとうはわたしの鋭い若さを感じる時間の中にいたい」のだと訴えている（57）。この「若さ」の時、言い換えればいずれ「老い」に向かう時間と、「無限の持続」は対置される関係にある。力に満ちた「若者」がやがて「老いて」行く時間 —— 人生の時間、有限の時間 —— を抜け出していくとき、そこには「無限の持続」が広がる。また、2つめに、そのために「少年」は「蛭」のような存在になるのだと言われている。「蛭」とは、他者の存在を盗み取りながら生き続ける「無環節」の生命体の喩であろうか。ペニスは身体を、生命体を分節化し、意味秩序へと構成する原点となる。男根が世界を分節化するのである。だから、本当の意味で「未定型」のもの、「形をもたない」ものとなるために、それを「切る」ことが必要になる（したがってそれは「去勢」ではない。未定型の欲望主体と化すことである）。

この行為によって「少年」が元の「17歳の少年」に戻る道は失われてしまう。しかし、そのようにして「少年」は解放される。「僕を解いてください」と言った「少

年」の言葉の意味したものとは別の形で、「男」はその体をつないでいた鎖から彼を解き放ったのかもしれない —— それは＜ことば＞からの解放、付与されていた本質からの解放である。「男」は「鉄環」を解かせ、「少年」を地下牢から階上の部屋へと背負って連れ出す。

実際、数ページ後の描写を先取りするならば、少年はその後自由自在に「女の内」に潜り込み、「女を操り、女の血を吸い、女を生き」るものとなるのだが、それは男としてではなく、「女になることも男になることも自由」な存在として、「自足を知らないアンドロギュヌス」としてのことであり、その「指」は「あらゆる棒状のもの」と「置き換え」可能だとされる。すなわち、本質をもたず、本質によって限定されることがない、変化自在の存在と化している。そのようなものとして、「男」は「少年」を埋葬し、また「家畜」化したのである (61)。

(4)「永遠」と「無限」——「街」の秩序に抗して

そのあと、「男」は食事を済ませ、「女」の部屋に通される。

全裸で、涙を流しながら横たわっているその姿を見て、「男」は、「この女は (…) まったくことばを介しないところにいる」(58) と思う。

ここでの「ことば」を、先に見た、存在に同一性を与え、主体化する＜ことば＞と重ねてみるならば、「女の濡れた重い存在」(58) は、分節化を通じて世界を秩序化する働きの外部にあると言うことができる。「男」はここで、先に「女」が発した言葉を反芻している。

> 「あなたは、ゆっくり、とんでもないところへ傾いていく世界の自転に、逆らわなければならない。そのために、この街の地下をあなたは掘りつづけなければならないのです。ずっと ——」(58)

「世界」がどこに傾いていこうとしているのかは語られない。しかし、いずれにせよ「男」は、その「自転」に抗う者として「この街の地下」を「掘り続けなければならない」のだ。「地上の秩序」＝「街」に対する根源的な抵抗の営みが、この「地下」で継続されなければならない。地下を掘り続けること。それはどこか他の場所 ——「平原」や「海原」—— へ抜け出すための行為ではなく、「存在」の「持続」

を支える「向こう側」の世界へと伸びてゆくことである。そうすることによって、「ことばになってしまう世界よりも、もっと先の世界」(58) が現れると「男」は考えている。ここで重要なのは、男が掘り下げようとしているのは、「ことば」の世界の先にあって、「持続」を支えている世界だということである。

「街」＝「地上」の世界の下層に、その秩序を支えている無定形の世界＝「闇」が広がっているという世界観は、「秩序の彼方へ」をはじめとする同時期の諸作品とやはり同型である。「僕の持続は永遠に通じるもの」(59) だと「男」は言う。ここでも、言語的および時間的分節性を排した「永遠の時間」というモチーフが現れている。

そのあと、「男」は「女」を抱き、その体の内に「自分を挿入させ」ていく。「わたしの内にあなたがいる。わたしの奥にあなたを感じている」、「あなたは烈しい私の内なる存在だ」と「男」は「女」に言わせる (59)。肉の交わりは「内在」の企て、他者の「内なる存在」となること、他者を自分の「内」に感じることである。そして、「執拗に (…) 持続をはかる」「男の頭蓋の中」に「地平の果て」が映る。「そして、空。海。宇宙 — 無限」(59)。

「永遠」と「無限」。「男」がこの地下の世界でくり返す肉の営みは、「時空」の限定性を超え出ようとする意志に貫かれている。

(5)「街」——「存在」を「盗みあう」者たちの群れ

続く数段落では「街」の描写がなされる (60–61)。

ここでの「街」は、「地下」の世界から区別された「地上」の秩序だけを指しているわけではない。「街」は「秩序」を失い、すべての要素 (ここでは「音」と記される) が同一性を失ったまま飽和し、「内部」に向かい、「住人たちのマツリ」の場に流れ込んでいる。そのマツリの舞台では、住人たちのなかに「主役」もなく、「顔のかたち」もなく、「所有者のある声」もない、とされる。つまり、個体が分節化され相互に関係づけられた形での秩序を失っている。そして、そこでは、存在者が個としての同一性を失い、互いの皮膚の交わりを通じて、侵入しあい、犯し、犯されることで存在を盗みあっている。それは、この「地下の館」で「男」たちが行っていることに他ならない。とすれば、ここでの「街」の描写は、地下空間での「男」たちのふるまいを必然化している世界、あるいは「状況」の描写であると言える。

「顔」を失くし、誰のものともわからなくなってしまった「声」を発しながら、すべての「住人」が群れ、おのおの無目的な営みに明け暮れており、人々は「他者」を犯し、「他者」に犯されながら、その「存在」を盗み、「自分のために吸収することができる」(60)。自己と他者を隔てていた薄い膜はやがて取り除かれ、「肉群（ししむら）の中に呑み込まれ」て、「沼底」に引き込まれ、「どこか遠くへさら」われる (61)。

この描写の途中で、「街の住人たち」であった主語が、いつのまにか「男」に移行している。それは、「街」の状況が、「男」の置かれている舞台のそれと連続的であることを表している。

「街」という言葉が、この「地下」の世界との関係において、二重の射程をもって使われていることは重要である。ある文脈では、「街」は三人がそこから逃れてきた「地上の世界」を指している。しかし、彼らが降りたったこの「地下の世界」もまた、「街」が生み出したものであり、その意味で「状況」の一部なのだ。だからこそ、「地下世界」が自足的に自立し持続することはできないのであり、のちに見るように、「地上」の人びとの欲望がこの「館」に呼び込まれざるをえないのである。

(6)「三人の方法」

その先に、「男」と「少年」と「女」の三者の交わりが描かれる。

「少年」はその「器具」を「女の間」にさし込み、「男」は自らの指を「女」の口にさし込んでいく。

「女の体」は「物のように自由に解き開かれ」ており、「少年の試みるあらゆる変化や衝撃」をやさしく受け入れる (62)。

「男」の「指」を口にさし込まれた「女」は、それを「かみ切る歓び」と「息をつめられる苦しみ」を同時に感じている (62)。

この場面で、三人ははじめて、互いの存在を受け入れることができている。「男」の「眼」の前で、「女」は＜モノ＞としての自在さをさらし、すべてを受けとめることができる。「少年」は、自らの「器具」を自在に変形させながら、「女」に内在することができる。そして「男」は、疲れ切った二人の肉体を夜通し「いとおしむ」(63)。ここにおいて「男」は、あるいは「三人」は、この「地下」における企てを

一つの形で達成しているように見える。すなわち、「地上」の存在として与えられた同一性を解きながら、＜モノ＞としての「無」に陥るのではなく、肉の交わりにおいて互いの存在を盗みあい、いとおしみあうものと化すこと。ここにおいて、この作品において唯一、達成感をともなう場面が生まれている。

しかし、互いの肉体に侵入し、傷つけ、同時に傷つけられながら、その存在を盗みあうような、このぎりぎりの交わりはどのように持続しうるのだろうか。

(7)「地下」にとどまることの困難

その後、計ることのできない時間が流れてゆく。そのなかで、「男」は「少年」との関係を持続させるしかないと思っている。しかし「少年」は「憔悴」し、自分には「持続の能力」が「あなた」のようには続かない、「先が視えてくる」ような気がして「歩きつづけてきた」のだがそれも「嘘のように思えてきた」、この「生の時間の過酷さ」の内にいるよりも、「いっそ化石のようにやさしい死の中にいたい」と言い始める (63−64)。「男」は怒り、「＜視る＞ことの苦悩」「＜持続＞の苦悩」は「おまえ」にはなかった、それは「おまえ」が「俺」に預けたものではなかったかと詰問する。それでも、「私をまた地底の煉獄へ還してください」と懇願する「少年」に、「男」はしばらく彼を深い闇のなかに「安置」するしかないと思う (64)。

「男」は「少年」を土牢に閉じ込め、「安置」する。その「治癒期間」が過ぎて、土牢のドアが開けられる。縛りを解いて、「少年」を背負い、「男」は地下牢からさらに下の階へと下りてゆく。そこには「巨大な洞窟」が口を開けて待っている。「男」にはそこが「限りない奥ゆきをもつ海」のように視える。

「(この洞窟は海に通じているようだ。あるいはもう海なのかもしれない)」(65) と「男」は思う。

「あなたならこの海を伝って、きっと外海まで泳いでいけるでしょう」(65) と「少年」は言う。

しかし、「男」はこの言葉に苛立ち、「俺たちがそんなにたやすく逃がれる出口なんてどこにもありやしない」、「おまえも俺も昼の海にはいられない」と吐き捨てる。「男」はこの「街」で「少年」に出会った、それが自分の「運命」であり「欲望」なのだと言う。そして、「少年」は「男」によって「庇護」されすぎたことで、「病菌のような＜光への郷愁＞」(66) に冒され、弱ってしまったのだと思う。

「男」は「少年」の体を洗い、ふたたび階上の部屋へと戻ってゆく。

この場面では、「館」の外にある「地上」の光の世界が「外海」「昼の海」として形象化され、衰弱した「少年」がその「外の世界」「光への郷愁」に動かされてしまう。それに対して「男」は終始、この「地下」の世界から出ていくことはもうできないと考え、行動している。だが、「少年」に「闇のもつ鋼鉄のような力を行き渡らせる」のは「不可能に近い」ことなのではないかとも思っている (66)。

「男」には「持続」への強い意志がある。しかし、「地下」の世界で、「街」の秩序に抗して「持続」することの困難が、「少年」の衰弱として語られている。

(8)「地下世界」の崩壊

次の場面 —— 実質的に作品の最後へと続く場面 —— は混乱を極め、簡潔に要約することができない。

「女」は「裸のままベッドの上に寝かされ」ている。

その体を腹部から二つに分断するように、天井から垂れ幕が下りている。

「男」は「女」の頭の側に、「少年」は「下腹部」の側にいる。

その「少年」の背後に、「無数の人影」がひしめいている。それは、「この街の異国人たち」で、「男」が「街の通りで拾ってきた」「黒人たち[4]」だとされる。「彼らは予め男のもくろみに従うことを約束させられていた」(66)。つまり、この「異国人」たちを呼び込んだのは「男」であり、「男」は彼らを自らの意志で操作しようとしていたことになる。

では、ここで彼は何をしようとしているのか。

ここで、「男」は「女に『ことば』をはじめる」(66) という表現が出てくる。「ことばをはじめる」とは何か。それは、具体的には、「少年」もしくは「彼ら」に「女」を犯させるということにほかならないが、その性的な交わりのもつ意味は、これまでの「少年」と「女」と「男」の肉の交流とは異質な意味をもっているようだ。

「男」は説明する。「彼ら」は「交わりに飢え、交わりのために命をかける」。しかし、「あの自然のままの＜欲望＞」にはなりえていない。「彼たちの間にはまだ＜ことば＞が意味をもっているからだ」(66) と。

ここで、「＜ことば＞が意味をもつ」世界と「自然のままの＜欲望＞」の世界とを対置することができるとすれば、「男」と「女」と「少年」はこれまで、＜こと

ば＞を逃れ、これを奪い取ることによって、自然の＜欲望＞のうちに交わり、存在を破壊しつつ、存在を盗みあうことを試みてきたと言えるだろう。しかし、この場面では、「街の異国人」「異邦人」「他者たち」でありながら＜ことば＞が意味をもっている存在が、「女」の体に侵入し、これを暴力的に破裂させようとしている。

その凄惨な性的行為の開始を、なぜ「『ことば』をはじめる」と呼ぶのか。

そもそも、なぜ「男」は「彼ら」を自らこの地下に招き入れたのか。

「ことば」という言葉が、これまでの文脈のなかで、原生的な生の蠢きや裸形の存在同士の肉の出会いとの対照において用いられてきたことを踏まえれば、「ことばをはじめる」とは、その「未定型の存在」に再び「存在者としての同一性」を備えさせようとする企てであると取れる。これまで「男」は「女」と交わることによって「女」をなくし、「ことばのとどかないところ」にいる存在としていつくしんできた。その「女」に再び「ことば」をほどこす。それは、「男」が他者を何ものかとして立ち上げ直し、個々に「形」を与えようとすることではなかっただろうか。そのために、＜ことば＞の力を自らが備え、いま再び「女」の存在を破壊しなければならなかった。それが、先に見た「永続」への欲望なのか、「主人」としての支配の確立の企てなのか、それとも自らが作り上げた世界を破壊しようとする衝動なのか、判読しきれない。

いずれにせよ、「街」の秩序に形を与える＜ことば＞と、「男」たちがこの「地下」の世界で獲得してきた「肉体性」とを二元的に配置しながら、この場面では、二つの世界の境界が破られようとしている。「彼たち」は確かにまだ＜ことば＞にとらわれているのであるが、「地上の現実」に安住しうるわけではない。「街」に対する「異邦性」をもった存在が、地下の世界になだれ込み、破壊のエネルギーをぶちまけて、「ジユウ」(67) の誕生をいざなう。そして、この「異邦人」たちによって、「女」の体が暴力に貫かれていく。

しかし、「女」は、自分の下腹部を突き上げる「暴力」に酔いはじめ、それを「少年」と呼ぶ。

「私の少年。私の器具。私への隷属。ああ、私の王。」(67)。

ここに、支配と被支配の反転が見られる。「女」に隷属し、その「器具」と化し

ていた「少年」が、「女」の「王」となっている。そこでは、「主人」が「奴隷」と化し「奴隷」が「主人」と化している。

だが、ここで「女」を犯しているのは、街から連れてこられた男たちである。それでも「女」は、「肉塊の暴力」に「毒々しい美の花弁のやさしさで応える」(67)。

その時、「眼を射る照明」が部屋を照らし、同時に、男たちの憎悪の目が「男」と「少年」に向けられる。彼らは「男」や「少年」を押し倒し、組み敷いて、犯しはじめる。「男」は、彼らによって犯されながら、「黒人たちの＜男＞を盗む」。

> 男は自分を貫いている黒人の感覚を感じる。男はいつか黒人を受け容れる女になる。そして男は黒人を盗む。(67)

自分が呼び込んだ者たちに自らも犯されてしまうことを、「男」は予期していたのか。それともこれは、目論見の破綻として生じたことなのか。これも、テクストからは明確には読みとることができない。しかし、いずれであるにせよ、「彼ら」を呼び込んでしまった「男」のふるまいが「三人の世界」を崩壊に至らしめたことは確かである。＜ことば＞を奪うことで成立した世界に、まだ＜ことば＞にとらわれた者たちを招き入れ、その力をふるわせてしまったことが、「地下空間」の瓦解を呼んだのだと、構造的には読むことができる。

ともあれ、やがて惨劇が終わり、部屋には「少年」の死骸が残されている。

そして「女」は「瀕死の雌鹿のように病んで」いる (67)。

「女」は、「私にも、あなたにもまだ先がある」と言いながら、「私の屍体を街の空高く掲げる」ことを「男」に求める。

> 「間もなく夜明けがくるわ。それまでにやるのです。あなた一人で。あなたは今のように弛緩したままやるといいわ。きっと一番みじめなのはあなたね。私が、もう、人々に無害の存在になる前に、あなたは私を極限にまで演出してみせるのです。明けやる死者の街に、私の裸形がかくも美しいオブジェへと転身したかと思われる程、あなたの才知を尽くすのです。死者たちの、あの、空洞のような眼にふさわしい程、私はやさしく美しいでしょう。私の白い体を幾筋も流れる血はきっと乾きはじめているわ。そしていつか私の屍体は焼けつく太

陽にひからび、この街の色のように死に絶え、枯れ枝のようになり、ものになって、もうだれも私を驚きの眼で見上げることもありますまい。一番みじめなのはあなたね。あなたには終わりもなく、残された方法もないわ。あなたは弛緩したままつづけるだけね。あなたには死ぬことさえ許されていないわ。あなたは生きつづけるのです。」(68)

「女」の「屍体」を街に高く掲げるという行為の意味は何だろう。それを「女」のたどってきた履歴（物語）から解釈するのは容易ではない。だが、この「異邦人」たちの乱入と性交と殺戮という「儀礼」が、その成就のために求める「供犠」の象徴として読むことはできるだろう。沸騰と錯乱の状態にあった男たちのエネルギーは、地下室を完全に破壊しつくすことでようやく浄化され、その犠牲として「美しいオブジェ」と化した「女」の裸体を要求する。

それは儀礼の終了を告げるシンボルである。「女」は、犯され、破壊されることによって、「犠牲」として聖性を帯び、「街」に掲げられる（68）。

「男」は「女のはりつけ」が終わったら、「少年」の屍体を海底に葬ろうと思う。

そして、「二人の秘密」を持ったまま「また昼の世界に還る」のだと考えている。

あの太陽の光に満ちる昼の世界へ。夜を生きる密度の高い反世界と秘密の領土をきり開くために―。男は自分の街へ還るだろうか、黒い爪と処女のやわ肌のような自らのあやしさに色どられた悪魔となって。

ああ、人と人の満ちあふれる街へ。煉獄に似た関係のただ中へ。白昼の生の中へ。生きることの苛酷な自己処罰をつづけるために―。(68-69)

かくして、白昼の街から離脱し、「地下の世界」「秘密の領土」に下り立った「男」の冒険は、「女」と「少年」の死によって終わりを告げ、「人と人の満ちあふれる」世界へと戻ってゆくことで閉ざされる。

2.「肉」の次元における存在の再創出とその破綻

この難解かつ不可解な小説には何が賭けられ、そして何が成し遂げられたのだろうか。

まず、物語の基本的な構図を再確認する。

「街」――「地上」の世界、「白昼」の生 ―― を横断しようとしていた「男」が、「女」に呼びかけられ、「館」――「地下」の世界、「闇」の領域 ―― に下りてゆく。

それは、地上の世界においてまとわされていた同一性を解いて、裸形の存在として他者と出会い直すということである。

そして、この小説を成り立たせる基本的な論理として、この裸形の存在同士の肉と肉の交わりは、自他未分の融合への回帰ではなく（少なくともそれだけでは充足されず)、「支配 - 被支配」の関係性を備えなければならない。一方は「主人」として他者を蹂躙し、他方は自己の存在を「手放し」、他者に隷属しなければならない。さらに言えば、その「主人」と「奴隷」の関係は、単なる一方的な支配と所有ではなく、自我を破壊されつつ、他者からの承認を獲得し、その他者によって「内側から」支えられるような、言い換えれば、＜ことば＞の剝奪と肉の交わりを経て「存在の再創出」にいたるような力動性を備えることが求められている。

そして、ある時点で、「三人」は一つの段階に到達したようにも見える。

当初、「館」に導き入れられた「男」は、そこに「女」と「少年」を見いだす。「少年」は「女」に支配され、すでに＜モノ＞と化しているが、「女」の意志を替わりに担い、「女」の器具として存在している。「男」は、この二人の「主人」として、彼らから＜ことば＞を奪い、その存在を解消しつつ、交わりのなかで、そこに新たな存在を生み出そうとする。そして、「三人の交わり」のなかで一つの達成が得られる。

しかし、その「地下の関係＝存在」は持続しえない。「少年」は「地上」の「街」に戻ることを望む。そしてついには、「地上から呼び込まれた者たち」が三人を襲い、犯し、「少年」は息絶え、やがて「女」も屍体となる。

「男」は、「女」の屍体を「街」に掲げ、「少年」を海の底に葬り、自らは「街」へ戻る。

ここには、（十分に読み解けない細部を孕みながら）構造的にはシンプルな神話的物語が展開されているように思われる。

まずは、「地上の生」、「街での人との交わり」が、「過酷な自己処罰」の場と化し

ていることが背景にある。「街」は、その住人になにがしかの同一性を付与し、何者かとして生きることを強いる。だが、人々はその秩序の内に自足できない。

人々は、＜マツリ＞の儀式を通して、存在の内部に下り立ち、「無秩序の放縦な自由」を味わおうとする。そこでは、人々は自在に交わり、自己は他者を犯し、自己は他者に犯されることを通じて、「存在を盗みとる」。

しかし、その「地下の世界」に持続することのできる強靭さを、人は持ち合わせていない。

「男」は、その「持続」を求めているが、「少年」はそれに耐えることができず、消耗していく。やがて、地下の世界は破壊され、「男」は「街」に帰還する。

もとより、この「地下」の世界が「地上の秩序」の反転として成立するリミナルな空間であるならば、人は「街」と「館」の往還をくり返す以外に生の可能性をもてないと言えるだろう。その限りでは、「生の時間の過酷さ」に耐えきれず、「やさしい死の世界」に還りたいという「少年」の方が、強靭にその「持続」に耐えて「地下の関係」を継続しようとする「男」よりも、生存の可能性をとらえていたのかもしれない。

だが、「男」の欲望は、存在の破壊と再生を担う「儀礼」の時空間を永続化することにあった。それは本質的な無理を孕む企てである。その儀礼の場に流れ込むエネルギーはやがて、その空間を内破させ、混乱を収束させるための「犠牲」を求めることになる。「明けやる死者の街」にかざされる「美しいオブジェ」としての「女」の死体は、儀礼の時間の終焉を告げる。

そして、冥界の旅を生き延びてしまった者は、「地上」の生活に戻らざるをえない。物語は、閉じた円環を示しているように見える。

3. 物語とその状況感覚

それにしてもこの奇怪な小説はいったいどのような「状況」のもとに生み落とされたのだろうか。

まず、起点には「恐怖」があったと見るべきだろう。

この地下の空間においてくり広げられる肉の交わりは、一切の法的な制約、規

範による制御を被っていない。それは「法の外部」で振るわれる暴力である。それは、例えば占領軍の支配のもとで、制裁も懲罰も課せられることなく性暴力がふるわれる空間と、論理的に相同的である。法の外部に投げ出された剝き出しの肉体同士の出会い。その過酷さに対する恐怖が物語の前提にあったと見ておかしくない。

その上で、テクストのなかには、被虐の快にふるえる声、犯され、損なわれること、苦悶のなかで死に至ることを羨望する声が響いていることも聞き逃すべきではない。しかし、恐怖を官能に転換しようとする欲望だけでは、この物語は成立しない。ここに起動する文学的想像力は、この密室の出会いを、忌避すべき恐怖の対象として描いているわけでも、耽溺すべき官能の場面としてとらえているわけでもない。「男」や「女」や「少年」は、既成の秩序の根源的な解体を経て、裸形の存在が力を奮い、力を被ることによって、あてがわれた本質を脱ぎ捨て、新たな存在へと転生し、かつその関係を持続させようとする。法の外部においてこそ可能になる生への欲望、そこに現働化する力への希求がテクストを駆動させていることを見なければならない。

したがって、物語の起点には、自己が投げ込まれた世界 ——「街」あるいは「状況」—— に対する両義的な身体感覚があると言える。一つには、法外の暴力に対する恐怖、自己の肉体が蹂躙され、存在が破壊されてしまうことへの原初的と言ってもよい怯えの感覚がある。しかし同時に、「街」における「生」への深い倦怠の感覚、それゆえにその秩序を破壊し、あてがわれてしまった自己の存在を解除し、原初的な生の混沌へと下り立って、再生しようとする欲望がある。一方において暴力に怯えながら、他方では暴力的な出会いのなかで存在を獲得することにしか生の可能性を見いだせない、明確な矛盾を孕んだ状況。そしてそれは、街を外れた地下の館に住む少数者だけの秘められた欲望ではなく、「街」にあって「街」に自足できない者達に通底する欲動のあり方として感受されている。だから、「地下」の世界に「街の異邦人」たちがなだれ込んでこざるをえない。密室における「男」と「女」と「少年」の企ては、この「状況」が産み落としたものにほかならず、その外部にあって永続することを許されていないのである。

この「街」を、戦後から60年代の沖縄というローカルなコンテクストに結びつけて読むことは可能である。例えば、占領下にあって、法の支配が及ばない場所

でふるわれる暴力が社会生活の根幹を支配するような状況。その世界に対する抜き去りがたい異邦性を感じながら、なお生き延びようとする者が、密室的な空間における二者的な出会いのなかで、一切の社会的属性を脱ぎ捨て、剝き出しの肉として他者に交わり、そこに存在の転生を賭けていく物語として位置づけてみることができる。池宮城は、その状況を特定の（ローカルな）時空間に限定されない「存在」の力動の場として感受し、恐怖をかいくぐり実存の出会いを介して生き延びていく可能性を問う、存在論的深度を備えた小説を書き継いだのだ。

文学表現の原点には、自己が投げ込まれた世界の手触り、肌触り、あるいは圧力に対する感受があり、それはしばしば、「状況認識」として鍛えられ、社会的な現実を語る作品として結晶化される。しかし、その身体感覚をもとに「隠喩的」に世界との関係を造型する、強く自律的な想像力が呼び起こされることもある。幻想小説や怪奇小説のリアリティは、その「状況感覚」の空想的形象化の内に見いだされる。池宮城のこの時期の諸作品もまた、「状況」を存在そのものの危機として感受する、この身体が起動させたものだと言えるだろう。

60年代の沖縄にあっては稀有な存在であったこの「密室の文学」は文学史の周辺に置き去られてきたが、「状況」に応える想像力の駆動の一形態として、そこに一つの可能性があったことを確認しておかねばならない[5]。

【注】

(1) もちろん、一連の作品の成立を可能にした影響関係を意識しつつ、これらをマルキ・ド・サドやザッヘル＝マゾッホの系譜のなかに位置づけ、対比的な読解を施すこと、彼らのテクストに結びつけられてきた諸理論を適応してみることも可能であるし、池宮城の作品のなかにはそれを促す要素も多く含まれている。しかし、既成の概念に回収して終らせることを避けるためにも、まずは作品の内部から「認識」を抽出していくことをここでの課題とする。

(2) この年齢をめぐるやり取りが物語のなかでもっている意味については、まだ十分に読み解けていない。もはや若さを回復できない「男」がこの地下室における存在の「持続」にこだわるのに対し、まだ「若者」であった「少年」は「やり直しがきくかもしれない」と思っているという対照性が示される。そこに

「若さ」への嫉妬を読むことはできる。しかし、そうした心理の解釈を、ここで試みている構造的な読解の筋道にうまく接続することができない。あえて図式的に見れば、「若さ」が意味をもつ時間、したがってまた「老い」に向って進んでいく時間と、「男」が希求する「永続する時間」とを対置することができるかもしれない。

(3) ここで「男」が「少年」のペニスを切断してしまったのかどうかは分からない。その後、「少年」は「男」の意志のままに「女」と交わっているが、そこでは「指」を挿入させている。あるいは、「少年」自身が「指」となっている (61)。また、その先の描写では、「少年」は「器具」を「女」の体に差し込んでいる (62)。この「器具」が「少年」の生身なのかどうかも判然としない。ただし、「女」が「少年」の「精液でベトベトに濡らされている」(62) という記述があるので、「少年」の体が完全に性的な力を失ってしまっているとは言えそうもない。「少年」は性器を完全に失っているわけではないようだ。しかし少なくとも、象徴的な次元において、ここで「男」は「少年」の男根を切除している。その意味で、「男」は「少年」のペニスを「切った」のである。ただしそれは「去勢」したことを必ずしも意味しない。

(4)「街」から呼び込まれ、三人を凌辱し、破壊する者たちは「黒人」と呼ばれている。なぜ彼らは「黒人」として描かれたのか。その含意を正確に読むことは難しい。人種表象としてはある種の政治的な問題を孕む表現であるが、その背景には、池宮城が目の当たりにしていた米兵の実像があるのかもしれない。また「街」に対しては「異邦人」であり、その秩序を抜け出そうとする欲望を抱えながら、＜ことば＞にとらわれ続けている存在として、彼らと自らの身を重ねていたところがあったのかもしれない。しかし、同時に、それは現実の「黒人兵」たちを描いたものではなく、「街」に対する「異邦性」を備え、その世界に安住できず、破壊的な衝動を抱えた存在、つまり「街の住人」でありながらその「周縁」に位置する者たちのイメージとして読むことも可能である。例えばここに、「秩序の彼方へ」において、「街」の下層に広がる「密林」で踊り続けていた「黒い人影」を重ね見ることができるだろう。2作品に共通しているのは、「地上の世界」として「街」の秩序を生きている者でもなく、「地下」の世界におりて何事かを企てるのでもない、いわば中間的な存在の群

れが、集合的沸騰状態にあるという描写である。「存在はかすめ盗る手つきに似て」では、この群衆が「地下」に呼び込まれ、しかしそのエネルギーは制御不能となり、「館」のなかにかろうじて築かれていたもう一つの秩序を破壊し、「男」の企てを崩壊させてしまう。それは、「地下」の世界が、「地上」の世界から切り離されて、自足的に持続することができないのだということを示している。「地下」の世界での「三人の交わり」は、「街」にあって「街に自足できない」人びとの情動と欲望が産み落としたものでもあるのだ。

(5) 後年池宮城（樹乃タルオ）は、雑誌『非世界』（第22号、2011年）において、『琉大文学』（23号、1967年）から、大学の同期生であった田中有の小説「廃港で」を転載し、「このような文体の小説を僕は読んだことがなかったので、正直打ちのめされたような気分だった」と記している。「街の下腹から伸びて暗い海と交わる防波堤は死に絶えた野獣の触手」（『非世界』第22号、p.4）から始まるこの小説が、池宮城の初期の諸作品にインスピレーションとスタイルを与えたようである。こうしたテクストとの関係性を明らかにし、『琉大文学』（とその周辺）のネットワークのなかでの池宮城秀一の立場取得を考察することも一つの課題となりうるが、これはまた別の機会に譲ろう。

【テクスト】

池宮城秀一（1968）「存在はかすめ盗る手つきに似て」、『存在はかすめ盗る手つきに似て』（作品集、自費出版）

【参考文献】

樹乃タルオ（2011）「田中有の『廃港で』について」、『非世界』第22号、「非世界」事務局

鈴木智之（2021）「二つの賭け金、二重の不可能性　1960年代の池宮城秀一を読む」、清田政信研究会『あんやんばまん』第3号、小舟舎

田中有（1967→2011）「廃港で」、『非世界』第22号、「非世界」事務局